

障害児・者の芸術活動支援者における障害者アートの価値認識概念 - 岩手県内の福祉事業所・特別支援学校による調査から -

佐藤匡仁

Value Recognition of Art Created by People with Disabilities in Supporters of Artistic Activities by Disabled Individuals : A Survey Conducted at Welfare Facilities and Special Support Education Schools in Iwate Prefecture

SATO Masahito

岩手県内全ての福祉事業所及び特別支援学校を対象に、障害者アートの価値認識概念（現在、理想、岩手）について自由定義法による質問紙調査を行った。その結果、3点ともに多く定義されたのが「社会や地域に参加する・交流する」、「本人が楽しい・喜び・好きなこと」等であった。理想で多く定義されたのは「自由に表現・形にとらわれない・時間に縛られない」、「オリジナリティ・個性・能力が発揮される」等であった。岩手では「これからの分野・まだまだ・ムーブメントは大きくない」、「一般の人を巻き込んでほしい・関心を高めたい」等が多く定義されたことから、障害者アートの価値がより多くの人に広く知られることへの期待が示唆された。

キーワード：福祉事業所 特別支援学校 芸術活動支援 障害者アート 価値認識概念

A questionnaire survey was conducted on recognizing the value of art created by people with disabilities (disability art) in all the welfare facilities and special support education schools in Iwate prefecture. Participants were requested to respond on "current disability art," "ideal disability art," and "disability art in Iwate prefecture" using free definitions. The results identified the following definitions of the three topics; "participation in society/ community and interactions," "what the artists themselves like, and enjoy." Moreover, many participants defined disability art as follows; "free expression/ignoring form and time," "displaying originality, individuality, and ability." Regarding disability art in Iwate prefecture, "a future field/not a big movement so far" and "general public should get involved/ interest should increase" were often mentioned. It is suggested that participants hoped that increasingly more people would recognize the value of art by people with disabilities.

Keywords: Welfare facilities, Special support education schools, Support for art activities, Art created by people with disabilities, Concepts of value recognition

I. はじめに

本研究は、「芸術活動を通じた障がい者の生きがいづくり-障がい者の社会参加を促進する公募展のあり方について-（研究代表者佐藤匡仁）」平成27年度岩手県立大学地域政策研究センター地域協働研究地域提案型前期として行った研究成果の一部である。この地域協働研究の成果の一部は、既に岩手県内の福祉事

業所・特別支援学校における芸術活動支援の現状と課題として報告しており（佐藤・村井, 2017）、本稿はその続報にあたる。先に報告した芸術活動支援の実態と課題では、主として次の点が明らかとなった。①岩手県内64.44%の事業所等で芸術活動支援に取り組まれていた、②芸術活動の内容として多い順に「絵（80.46%）」、「歌（51.72%）」、「書道（44.83%）」等へ

の支援に取り組まれていた、③取り組みがないと回答した事業所等の理由として、「生産活動優先で余裕がない (66.67%)」、「いずれと思うが取り組めていない (22.92%)」、「本人に関心がない (20.83%)」等があげられた、④芸術活動支援を始めるために必要な条件として、「制作支援による利用者の変化・成果を知る (33.33%)」、「地元での展示・発表機会の増加 (30.37%)」、「専門家の訪問による支援方法の教示 (25.93%)」等があげられた、⑤いわて・きららアート・コレクションへ出品経験があると回答した事業所等の出品理由として、「社会参加の機会 (90.57%)」、「他の活躍の機会に繋がる (11.32%)」、「作品の評価を知りたい (9.43%)」等があげられた、⑥出品しない理由として、「生産活動が忙しい (39.56%)」、「出品に値する作品がない (18.68%)」、「本人が制作しなくなった (8.79%)」等があげられた、⑦出品したいとなる条件の自由記述では、「研修機会の準備と気軽な相談窓口」、「評価のあり方」、「出展料やコスト負担」、「搬入・搬出・鑑賞コスト負担」、「生産性や工賃との関係」、「その他」等に分類された。これらの結果から、6割を超える事業所等が芸術活動支援に取り組む一方で、4割弱は生産活動を優先している事業所運営や経営判断についても窺い知ることができた。出展料や搬入・搬出・鑑賞コスト等の負担をはじめ、明らかになった課題を改善していく方策を講じていくとともに、取り組みのない事業所等にも訴求する芸術活動支援や障害者アート自体の魅力を探索し、支援に動機づける価値を追求することが求められていることも示唆された。

それでは、障害児・者の芸術活動支援者にとって、障害者アートの価値とはどのように認識されているのであろうか。障害者アートが見る者や支援者の心を捉え、芸術活動を支援したいとの気持ちにさせるにはどのようにしたらよいのであろうか。障害者アート作品を目にすると“思わず心を動かされる”、“一瞬にして魅了される”経験を述べる人が少なくない中で、芸術活動への支援を動機づける魅力や価値はどのようなものとして認識されているのであろうか。これらの問いに接近していく障害者アートの魅力や価値を抽出できれば、現在行われている芸術活動支援の取り組みと照応させて、新しい価値や充足されていない魅力の創出に繋げることが期待できる。

次に、芸術活動支援者自身がまだ気づいていない価値や、現状では充足されていない魅力を調査するため

に、本稿では、Dohkan, Hayashi, Masuda, & Fukuchi (1999) や林 (2001) の研究を参考に自由定義法を用いることにした。設定された選択肢の中から選ぶ方法よりも、新しい価値や気づいていない魅力を回答者自身の言葉で定義してもらう方法が本研究の目的には適していると考えた。そこで、「現在の障害者アート」、「理想の障害者アート」、「岩手の障害者アート」について自由に言葉で定義してもらい、それぞれの定義度数の傾向と特徴から、障害児・者の芸術活動支援者が障害者アートの価値をどのように認識しているか、価値を構成する概念について把握することを試みたい。

本研究の目的は、岩手県内全ての福祉事業所、及び特別支援学校を対象に、障害者アートの価値認識概念について調査し、芸術活動支援に携わる担当者の視点から、現在の障害者アートでは充足されていない価値を抽出することである。

II. 方法

1. 対象

岩手県内全ての福祉事業所 (292 箇所) 及び特別支援学校 (16 校)、計 308 箇所を対象とした。

2. 手続き

2016年2月～3月にかけて、郵送法による質問紙調査を実施した。回答者は、各事業所・学校において、障害児・者の芸術活動支援を担当する職員や教師、もしくはそれに相当する方1名に依頼した。質問内容は次の通りである。「あなたにとって、①「現在・普段取り組んでいる障害者の制作活動・アート」、②「理想の障害者の制作活動・アート」、③「岩手の障害者の制作活動・アート」とはどのようなものですか。思いつくまま自由に定義してください。それぞれ必ず3つ以上ご記入ください。」とし、自由定義法にて行った。分析方法は、①現在の障害者アート、理想の障害者アート、岩手の障害者アート、それぞれに定義された言葉の度数をカウントし、量的・質的な違いを把握した。②現在の障害者アートと理想の障害者アートの価値認識概念として、共通して定義された内容の度数を全度数に対する割合として求め、両者の組み合わせで散布図を作成した。③理想の障害者アートのみに定義された内容から障害者アートの「新しい」価値を探索した。④岩手の障害者アートに定義された言葉から、岩手の芸術活動支援の改良点やこれから方向性を把握した。

倫理的配慮として、①調査は研究目的で実施されること、②「個人情報保護法」を遵守すること、③質問紙調査への参加は各事業所・学校担当者の自由意志であること、④いつ調査を撤回してもいかなる不利益も生じないこと、⑤回答したくない項目があれば無理に回答する必要のないこと、⑥報告に際しては個人・団体が特定されない細心の注意をはらうことなどを質問紙に明記した。

Ⅲ. 結果

調査の結果、回収数 137、回収率は 44.48%であった。

1. 属性

回答者の属性は次の通りである。性別は、男性 53 人 (39.55%)、女性 81 人 (60.45%) と 6 割が女性であった。年齢は 40 代が 57 人 (42.54%)、50 代が 31 人 (23.13%)、30 代が 29 人 (21.64%)、60 代が 8 人 (5.97%)、20 代が 8 人 (5.97%)、70 代が 1 人 (0.75%) と、約 4 割が 40 代で最も多かった。勤続年数は、5 年以下が 29 人 (22.48%)、11 年～15 年が 29 人 (22.48%)、6 年から 10 年が 28 人 (21.71%) と 15 年までがそれぞれ 2 割ずつ全体の 65% 程度であった。芸術活動支援に携わった年数は、5 年以下が 63 人 (63.64%)、6 年～10 年が 17 人 (17.17%)、最も長くて 31 年～35 年に 1 人回答され、約 6 割が 5 年以下と最も多かった。職名は、サービス管理責任者が 46 人 (35.66%)、美術(芸術)担当者が 11 人 (8.53%)、その他が 72 人 (55.81%) で、その他には、生活支援員 24、施設長 7、職業指導員 4、相談支援専門員 2、等が記述された。

2. 障害者アートに関する現在・理想・岩手の価値認識概念

現在の障害者アートについて 77 トピック、理想の障害者アートについて 85 トピック、岩手の障害者アートについて 66 トピック、それぞれ記述を抽出した。

(1) 現在・普段取り組んでいる障害者の制作活動・アート

Figure1 に、現在・普段取り組んでいる障害者の制作活動・アートの定義について記述された内容の頻度を示す。「社会・地域に参加する、交流する」が 10 と最も多く、社会参加の機会と捉えていることが推察される。第二位に「本人が楽しい・喜び・好きなこと」8、「自信がもてる・励みになる」8 と、本人の満足や動機付けを重視していることもうかがえる。第三位以

降は「よい作品を発表する場」5、「余暇・レクリエーション」5、「感動を与える」4、「自由に表現する」4、「自発的・誰かにさせられるものではない」3、「想像力・集中力を高める・豊かにする」3、「気軽・取り組みやすい・難しくない」3 と続く。

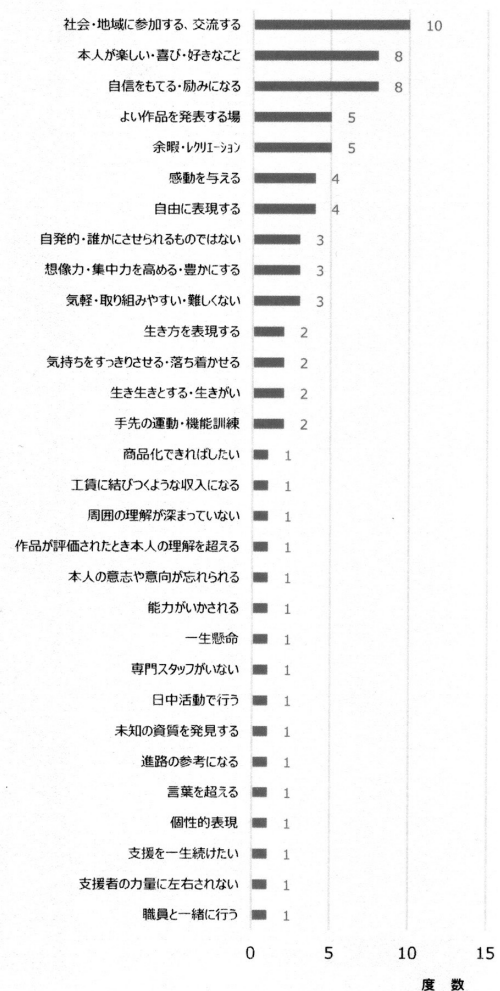


Figure 1 現在の障害者アートの定義

(2) 理想の障害者の制作活動・アート

Figure2 に、理想の障害者の制作活動・アートの定義について記述された内容の頻度を示す。「社会・地域に参加する、たくさんの人とつながる」が 11 と最も多く、理想としても社会参加の機会になることを重視している。第二位に「自信をもてる・誇り・勇気をもてる」9、第三位に「喜び・楽しみ・感動・笑顔を感じられる」7、「自由に表現・形にとらわれない・時間に縛られない」7、と続き、本人の満足や動機付けに加えて、自由さを重視していることもうかがえる。以降は「オリジナリティ・個性・能力が肯定される」5、「芸術性を正當に評価されるべき」4、「一生続けられる・

生きがいを得る」4、「感動を与える」4、「社会に発信する」4、「自分を出させる・存在を示す」4、「本人の思い・意志・意向が優先される」4、「収入を得る・経済的対価を得る」3、「気軽・誰もが取り組める」3と続く。



Figure 2 理想の障害者アートの定義

(3) 岩手の障害者の制作活動・アート

Figure3に、岩手の障害者の制作活動・アートの定義について記述された内容の頻度を示す。「これからの分野・まだまだ・ムーブメントが大きい」、「社会・地域に参加する・たくさんの人とつながる」が6と最も多く、社会参加の機会と捉えているとともに、期待される水準との差を示し、将来への期待が高いことがうかがわれる。次いで「一般の人を巻き込んでほしい・関心を高めたい」4、「表に出る機会が少ない・発信の場を設けるべき」4、「自信をもてる・励みになる」4、「広く知られている・社会に発信している」4、「全国でも力を入れている・活発」3、「独創的・独自の表現・その人らしさ」3、「生き生きと制作できる場・生きがいづくり」3、「熱心に理解推進する人・団体がある」3、「連

携して裾野を広げたい・少しでも取り組みを」3と続く。

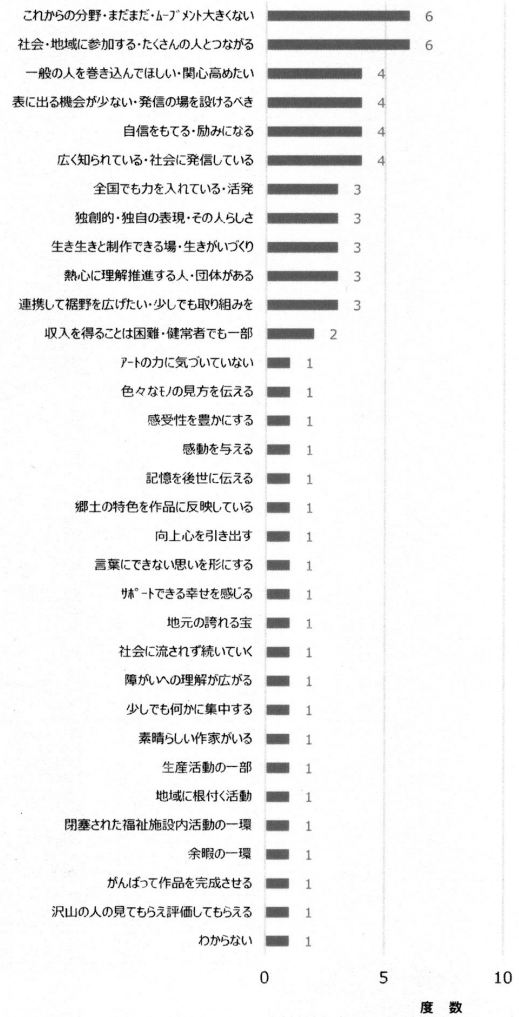


Figure 3 岩手の障害者アートの定義

(4) 障害者アートの価値認識における理想と現在

Figure4に、現在・普段の障害者アートの定義と理想の障害者アートの定義とで、共通して示された内容を組み合わせて散布図を作成した。対角線を記した右下の項目は、理想定義度数より現在定義度数が大きいことから、既に現在・普段の取り組みによって充足されている領域とみなす目安とした。左上の項目は現在定義度数より理想定義度数が大きいことから、実現すれば喜ばしい価値になる可能性のある領域とみなす目安とした。対角線上にある項目はちょうど満たされている価値とした。右下に布置された定義は、「本人の楽しみ・喜び (10.39%・8.24%)」()内は、(現在定義比率・理想定義比率)である。以下同様。),「良い作品の発表・作品の発信 (6.49%・4.71%)」,「余暇・レクリエーション (6.49%・4.71%)」,「感動を与

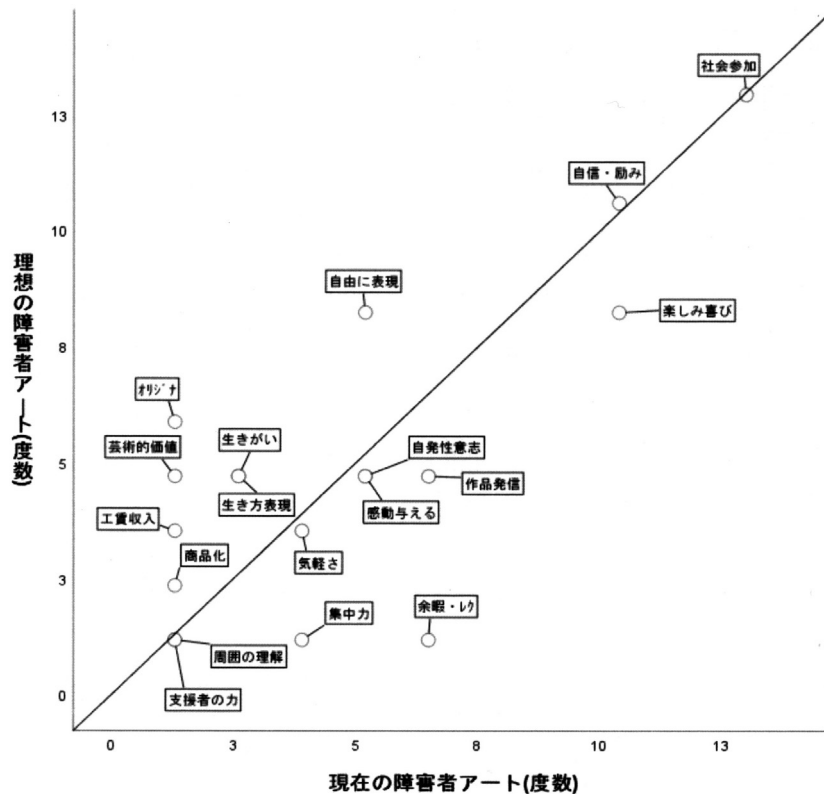


Figure 4 障害者アートの価値認識における理想と現在

える (5.19%・4.71%)」、「自発的なもので本人の意志優先 (5.19%・4.71%)」、「集中力 (3.90%・1.18%)」、「気軽に取り組みやすい (3.90%・3.53%)」であった。左上に布置された定義は、「自由に表現・形にとらわれない・時間に縛られない (5.19%・8.24%)」、「オリジナリティ・個性・能力の肯定 (1.30%・5.88%)」、「生きがいを得る (2.60%・4.71%)」、「生き方の表現 (2.60%・4.71%)」、「芸術性の正当な評価 (1.30%・4.71%)」、「工賃収入・経済的対価を得る (1.30%・3.53%)」、「商品化 (1.30%・2.35%)」であった。対角線上の定義は、「社会・地域に参加する (12.99%・12.99%)」、「自信・励み・誇り・勇気 (10.39%・10.59%)」、「周囲の理解 (1.30%・1.18%)」、「支援者の力 (1.30%・1.18%)」であった。

(5) 理想の障害者アートのみに定義された内容

現在・普段の障害者アートに定義されず、理想の障害者アートに定義された内容は、現在・普段の芸術活動支援にはない新しい価値である可能性も示唆され

る。それらを見ていくと、「工業デザイン」1、「エネルギーギッシュ」1、「ボーダーレス」1、「世界を広げる」1、「環境が大切」1、「身近で取り組んでほしい」1、「本人に刺激がある」1、「取り組むことはない」1、「事業の一部」1、「あくまで個人の趣味」1であった。

IV. 考察

自由定義法を用いて、障害者アートに対する価値認識概念を抽出してきた。研究目的に沿って、現在の障害者アートでは充足されていない価値の抽出を中心に検討していく。

まず、現在・普段の障害者アート、理想の障害者アート、岩手の障害者アート、3者いずれも共通して多くの回答が挙げられたのが、「社会・地域に参加する・交流する」と、「本人が楽しい・喜び・好きなこと」や「自信をもてる・励みになる」であった。多くの回答者が障害者アートの価値と認めて重要と考えている。違いを見ていくと、現状・普段の障害者アートに比べて、理想の障害者アートでは「自由に表現・形

にとらわれない・時間に縛られない」ことや「オリジナリティ・個性・能力が発揮される」こと、「芸術性を正當に評価されるべき」こと、「一生続けられる・生きがいを得る」ことなどの頻度が高くなる。また、岩手の障害者アートでは、「これからの分野・まだまだ・ムーブメント大きくない」や「一般の人を巻き込んでほしい・関心を高めたい」、「表に出る機会が少ない・発信の場を設けるべき」などが上位に並び、よりいっそう大勢の人に広く知らせたいことへの期待が感じられる。ただし、「全国でも力を入れている・活発」や「熱心に理解推進する人・団体がある」なども複数挙げられており、これまでの取り組みについて認知されていることも読み取れる。

次に、Figure4 に示すように、現在・普段の障害者アートの定義を横軸に、理想の障害者アートの定義を縦軸にして作成した散布図では、すでに充足されている価値は対角線より右下に布置される。すなわち、「本人の楽しみ・喜び」、「余暇・レクリエーション」といった価値はすでに満たされている価値と考えられ、加えて、障害者アートにとって重要と思われる「良い作品の発表・作品の発信」、「感動を与える」、「自発的なもので本人の意志優先」、「気軽に取り組みやすい」、「集中力」といった価値も、どちらかと言えばある程度満たされていると捉えられているかもしれない。また、対角線上にはちょうど充足されている価値が布置されるが、ここでは「社会・地域に参加する」、「周囲の理解」、「支援者の力量に左右されない」がそれに近い。そして左上に布置されたのは、「自由に表現・形にとらわれない・時間に縛られない」、「オリジナリティ・個性・能力の肯定」、「生きがいを得る」、「生き方の表現」、「芸術性の正當な評価」、「工賃収入・経済的対価を得る」、「商品化」といった価値であった。これらは現在定義度数より理想定義度数が大きい、いわば満たされていない項目であるので、回答者にとってより重要な価値に映ることが推測される。価値の実現に接近できれば、芸術活動支援をいっそう推進する魅力になる。

最後に、理想の障害者アートに定義され、現状・普段の障害者アートでは挙げられなかった言葉は、現状にない新しい価値である可能性がある。「商品化」は現状・普段にもあるが、理想にある「工業デザイン」、「工芸品に普通に」、「エネルギー」、「ボーダーレス」などの言葉はなかった。デザインや異業種

とのコラボレーションは、新しい障害者アートの価値として可能性を探る1つの方向と思われる。岩手の障害者アートでは、アートの力の潜在能力や眠った才能、すでに存在する優れた作家を含めて掘り起こし、世の中へ送り出すことへの期待の言葉が目立った。多くの人が芸術活動を経験し、それまで知られていない能力を開花できたり発掘したり、その先にある社会参加の方向へ広く取り組みを進めていくことが期待される。

付記

本研究は、平成27年度岩手県立大学地域政策研究センター地域協働研究地域提案型前期「芸術活動を通じた障がい者の生きがいづくり－障がい者の社会参加を促進する公募展のあり方について－（研究代表者佐藤匡仁）」の助成を受けて行った研究成果の一部であり、村井資氏（いわて・きららアート協会事務局）との共同研究である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、調査にご協力いただきました岩手県内の福祉事業所及び特別支援学校の皆さまに、記して感謝の意を表します。

引用文献

- Dohkan, K., Hayashi, T., Masuda, M. and Fukuchi, Y. (1999) An application of Kansei engineering to a cosmetic product —Application of Dohkan method —. In Soon Yo Lee, ed., Kansei Engineering II —Human sensibility ergonomics —. Ingankyngyungsa. 13-22.
- 林俊克 2001 ワインの顧客価値調査. 朝野熙彦(編) 魅力工学の実践 海文堂出版 81-100
- 佐藤匡仁・村井資 2017 岩手県内の福祉事業所・特別支援学校における芸術活動支援の現状と課題 岩手県立大学社会福祉学部紀要 19 55-63